

日本経済新聞

7月18日

木曜日

日本経

【第三種郵便物認可】

33 新潟経済

新潟県佐渡市で廃校となった小学校を酒の仕込み蔵に再生し、体験プログラムを実施しているのが地元、尾畑酒造の「学校蔵」だ。毎年タンク1本につき3〜4人を1週間受け入れる。6年目を迎え、最近では外国からの参加者も多い。講師を招いた「特別授業」には島内外から120人が参加するなど、学びを通じた交流の場となっている。

7月6日、4人の研修生が原料の水やコメなどを3回に分けて仕込む「三段仕込み」の作業に取り組んでいた。この日はプログラムの6日目。蒸した酒米を冷ましたり、タンクの中をかき交ぜるなどの工程もさずがに手慣れた様子だ。

今年には計10人を受け入れており、7人は海外からの参加だ。オーストラリアから来たというトーマス・サットンさんは、実際に酒造りに携われたのは貴重な体験。学校蔵がなかったら佐渡に来ることはなかったと思う。美しい場所で大都市にはな

廃校で酒造り体験

(佐渡市)



体験プログラムは3〜4人を1週間受け入れる

まちづくり 人づくり

い魅力にあふれている」と話す。

学校蔵は「日本で一番夕日がいっぱいな学校」とうたわれながら、2010年に廃校となった旧西三川小学校を尾畑酒造が借り受け、夏に仕込み蔵として活用している。体験も、自社の事務や営業の社員に酒造りを知ってもらう研修として実施したのが始まりだった。

「酒造りを伝えていきたい」との思いで一般の人の受け入れに踏み切った」と平島健社長は振り返る。1時間程度の酒造り体験といつたものではなく、「清掃作業がこんなに多いと思わなかった」という感想もよく聞くとで伝わるものがある」と強調する。

体験プログラムは様々な波及効果ももたらしている。例えば昨年参加した東京在住の米国人は、都内で外国人向けに酒のイベントを開催。スペインからの参加者の友人が翌年、学校蔵を訪れたこともある。平島社長は「長く続けることで交流人口の増加につながれば」と

新潟

世界中から人集う拠点に

期待する。

交流を担うもう一つのプロジェクトが、体験プログラムと同じ年に始めた多様な視点で「地域」を考える「特別授業」。

毎年6月に日本総合研究所首席研究員の藻谷浩介氏や東大社会科学研究所教授の玄田有史氏らを招き、学校よろしく1時間50分の授業を3コマ実施する。最後の4コマ目はディスカッションだ。

初年度の参加人数は40人だったが、現在の定員は120人。島外からの参加者は海外を含め半数を占める。年齢も10代から70代まで幅広い。

これまで取り上げたテーマは「地方で起業二世帯から佐渡を見る」など。尾畑留美子専務は「多様な人たちが同じ場所で一つのことを一緒に考える。毎回、参加した人たちの発想に変化が生まれるのを感じる」と話す。

かつて地元の児童が通った学びや時を超え、世界中から人が集う拠点へと、その姿を新たにしている。(小田原芳樹)